

⑫ 公開特許公報(A)

昭64-16713

⑤ Int.Cl.

A 61 K 7/32
A 61 L 9/01

識別記号

庁内整理番号

6971-4C
R-6779-4C

⑬ 公開 昭和64年(1989)1月20日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全9頁)

⑭ 発明の名称 消臭剤

⑮ 特 願 昭62-170897

⑯ 出 願 昭62(1987)7月10日

⑰ 発 明 者 石 川 正 夫 神奈川県横浜市保土ヶ谷区和田1-15-3-705
⑱ 発 明 者 渋谷 耕 司 神奈川県中郡大磯町東小磯370-7
⑲ 出 願 人 ライオン株式会社 東京都墨田区本所1丁目3番7号
⑳ 代 理 人 弁理士 小島 隆司

明 細 書

1. 発明の名称

消 臭 剤

2. 特許請求の範囲

1. 消臭有効成分と酸化還元剤とを併用したことを特徴とする消臭剤。

2. 消臭有効成分に予め酸化還元剤を作用させたものを配合するようにした特許請求の範囲第1項記載の消臭剤。

3. 消臭有効成分と酸化還元剤とを混合して配合するようにした特許請求の範囲第1項記載の消臭剤。

4. 消臭有効成分が紅藻植物、褐藻植物、裸子植物及び被子植物から選ばれる1種又は2種以上の植物の消媒抽出物である特許請求の範囲第1項乃至第3項のいずれか1項に記載の消臭剤。

3. 発明の詳細な説明

産業上の利用分野

本発明は、優れた消臭力を有し、人体、家庭、

環境などで発生する悪臭に対して広範囲に利用することができる消臭剤に関する。

従来の技術

従来より、口臭の除去、一般家庭や工場などで発生する悪臭に対する消臭剤としては、消臭有効成分として消臭力を有する植物の抽出物を配合した消臭剤(特開昭57-204278号、同61-240960号、特願昭61-169567号等)、過ホウ酸ナトリウム、過酸化水素等の化学薬品を使用した消臭剤、パバインなどのタンパク分解酵素等の酵素を配合した消臭剤(特開昭52-38026号、同52-38027号、同60-58150号)、更にはキノンの消臭力に着目した消臭剤(特公昭51-33974号、同53-45372号)などが提案されている。

発明が解決しようとする問題点

しかし、これらの消臭剤は、消臭力が弱く、効果が不十分であったり、消臭有効成分を多量に配合すると着色や味覚の低下、沈殿等の問題が生じる場合がある。また、化学薬品や酵素を使用した

消臭剤は、比較的消臭効果が強いものもあるが、いずれにしてもその消臭力を更に増強することが望まれる。

本発明は上記事情に鑑みなされたもので、消臭力が高く、応用範囲の広い消臭剤を提供することを目的とする。

問題点を解決するための手段及び作用

本発明者らは、上記目的を達成するため鋭意検討を重ねた結果、消臭有効成分と酸化還元剤とを併用することにより、両者が相乗的に作用して非常に消臭効果の高い消臭剤が得られることを見出した。

以下、本発明につき更に詳述する。

本発明の消臭剤は、消臭有効成分と酸化還元剤とを併用するものであり、口内のニンニク臭、口臭、タバコ臭等を予防、除去するための歯磨、洗口剤、マウススプレーやトローチ、ガムなどの口腔製品、飲食品、人体の体臭や生理臭を予防、除去するための石けん、スプレー、シャンプー、リンス、クリーム、化粧水などの皮膚用、毛髪用化

粧料、フットスプレー、靴の下敷、また家庭内のカベのタバコヤニ臭に対する脱臭消臭剤、室内清浄用フィルター、トイレの汚水臭や蒸臭に対する脱臭消臭剤、中和剤、ゴミの生ゴミ臭や腐敗臭に対する脱臭消臭剤、ペットの動物臭を予防、除去するための石けん、ボディシャンプー、更には車の排気ガスや車内臭に対する脱臭消臭剤、工場や畜産場内の汚水処理場や加工場、パルプ工場に用いる脱臭消臭剤、低臭飼料など、人体、家庭、環境等で発生する悪臭に対するデオドライザーとして広く利用される。

本発明の消臭有効成分としては種々のものを用いられるが、安全性等の面で植物由来のものが好ましい。原料となる植物は種々選択されるが、特に紅藻植物、褐藻植物、裸子植物、被子植物で消臭効果を有するものを用いることが好ましく、具体的には紅藻植物門のスギノリ目オゴノリ科のオゴノリやスギノリ科のスノマタ、イギス目フジマツモ科のハネソノ、クロソノ、コブソノ、パピラソノ、褐藻植物門のナガマツモ目モズク科のモズ

ク、コンブ目のコンブ科のアラメ、クロメ、ビバマタ目ホンダワラ科のヒジキ、ホンダワラ、アカモク、ノコギリモク、ウミトラノオ、オオバノコギリモク、ネジモク、ナラサモ、マメダワラ、ヤツマタモク、ヨレモク、イソモク、トゲモク、エンドウモク、フタエモク、コンブ目アイヌワカメ科のワカメ、裸子植物門のイチョウ目イチョウ科のイチョウ、マツ目スギ科のメタセコイヤ、被子植物門のコショウ目コショウ科のコショウ、ヒハツ、クベバ、ブナ目カバノキ科のシラカバやブナ科のケルクス、タデ目タデ科のダイオウ、ヤナギタデ、キンボウゲ目モクレン科のコブシ、ホオノキ、ゴミシやキンボウゲ科のボタン、オウレン、サラシナショウマ、キンボウゲ目アケビ科のアケビ、メギ科のナンテン、イカリソウ、クスノキ科のサッサfras、クスノキ、ケシ目ケシ科のケシやアブラナ科のタイセイ、ヘイシソウ目モウセンゴケ科のモウセンゴケ、バラ目マンサク科のハマメリス、バラ科のヤマザクラ、ヘビイチゴ、サンザシ、マメ科のラタニア、スオウ、オウギ、フウ

ロソウ目ミカン科のサンショウ、キハダ、ヘンルータやセンダン科のセンダン、側膜胎座目ツバキ科のチャ、ツバキ、テンニンカ目ザクロ科のザクロ、フトモモ科のクローブ、ユーカリ、オールスパイス、傘形花目セリ科のセロリ、アニス、カサモチ、ツツジ目ツツジ科のアセビ、圓旋花目モクセイ科のレンギョウ、管状花目シソ科のセージ、タイム、マジョラム、ローズマリー、コガネバナ、ナギナタコウジュ、メリッサ、オランダハッカ、ブラックミント、シソ、バジル、オレガノ、セーボリー、ナス科のクコ、コマノハグサ科のコオウレン、アカネ目アカネ科のアセンヤク、キキョウ目キク科のチゴ、タラゴン、アルニカ、ショウガ目ショウガ科のカジュツ、サンナ等が例示される。

なお、これら植物から溶媒抽出物を得る場合、植物としては全草を使用しても、また葉、樹皮、花、果皮、果実、根茎、根等植物の各部位を使用してもよく、使用する植物に応じ、その植物の消臭有効成分を比較的多く含有する部位を選択して使用することができる。

これらの植物から消臭有効成分を得る場合は、公知の方法を採用し得、例えば植物を乾燥した後、切断し、粉末としたものを水、エチルエーテル、エチレンクロライド、ジオキサン、アセトン、エタノール、*n*-ブタノール、酢酸エチル、プロピレングリコール等の極性溶媒の1種又は2種以上、もしくは*n*-ヘキサン、石油エーテル、リグロイン、シクロヘキサン、四塩化炭素、クロロホルム、ジクロロメタン、1,2-ジクロロエタン、トルエン、ベンゼン等の非極性溶媒の1種又は2種以上或いはこれら極性溶媒と非極性溶媒との混合溶媒で抽出する方法を採用することができる。この場合、抽出操作としては通常の方法を採用でき、例えば植物を溶媒に浸漬するなどの方法が採用できる。

なお、上記抽出操作で得られた抽出液は、溶媒を留去したものを消臭剤に配合するのが通常であるが、場合によっては、特に溶媒が水、エタノール等の場合は溶媒を留去せずにそのまま消臭剤に配合することもできる。

F_2 , Cl_2 , Br_2 , I_2 など

(5) 過酸化物類

H_2O_2 , Na_2O_2 , BaO_2 , ZnO_2 , K_2O_2 , Na_2O_2 , CaO_2 など

(6) ペルオクソ酸類

$Me_2S_2O_8$, Me_2SO_5 , HCO_3H など

(7) 酸素酸類

$MeClO$, $MeBrO$, $MeIO$, $MeClO_2$, $MeBrO_2$, $MeIO_2$, $MeClO_3$, HIO_3 , $Me_2H_2IO_3$, $MeIO_4$ など

(8) 金属塩類

$FeCl_2$, $CuSO_4$, $CuCl_2$, $SnCl_4$, $ZnCl_2$ など

(9) 酸素類

空気, 酸素, オゾン など

(10) 酸化物類

CaO_2 , AgO , CuO , BiO_2 , OsO_4 , SeO_2 , MnO_2 , SnO_2 , AsO_3 , FeO , CaO など

なお、上記式中 Me は 1 価金属、 R は炭素数 1 ~ 20 のアルキル基、アルケニル基、アリル基、

また、植物抽出物としては、上記抽出物の 1 種を単独で又は 2 種以上の混合物（抽出物の混合物又は 2 種以上の植物を同時に抽出処理して得られたもの）として使用し得る。

更に、本発明において使用する酸化還元剤の種類は酸化還元剤以外のものであれば特に限定されず、無機化合物でも有機化合物でもよく、例えば下記に示すものの 1 種又は 2 種以上を使用することができる。

無機化合物

(1) 過マンガン酸類

$HMnO_4$, $MeMnO_4$ など

(2) クロム酸および関連化合物

CrO_3 , $Me_2Cr_2O_7$, Me_2CrO_4 , R_2CrO_4 , $MeCrO_3Cl$, CrO_3Cl_2 など

(3) 硝酸および関連化合物

HNO_3 , N_2O_4 , N_2O_5 , N_2O , $Cu(NO_3)_2$, $Pb(NO_3)_2$, $AgNO_3$, KNO_3 , $NaNO_3$, NH_4NO_3 など

(4) ハロゲン類

アルキルアリル基を示す。

有機化合物

(1) ペルオクソ酸類

$C_6H_5CO_3H$, $CH_3CH_2CO_3H$, $C_6H_5(CO_3H)_2$, CF_3CO_3H など

(2) 金属塩類

酢酸銅, 酢酸亜鉛, クエン酸銅, クエン酸亜鉛, コハク酸銅, コハク酸亜鉛, マロン酸亜鉛, アスコルビン酸亜鉛, アスコルビン酸鉄 など

(3) 染料

アニリンブラック, ウルソール, アミノフェノール など

(4) 酸化防止剤・抗酸化剤

キノン類, アミン類, フェノール類 など
(ハイドロキノン, ナフトキノン, アントラキノン, フェノール-β-ナフチルアミン, ビタミン E, セザモール, ビタミン C, クエルセチン, ジブチルオキシトルエン, ブチルオキシアニソール, プロトカテキユ酸

エチル、グアヤク脂、フルジヒドログアイアレチン酸、ブチルヒドロキシトルエン、 β -ナフトール、フェニル- α -ナフチルアミン、重リン酸トリブチル、重リン酸トリフェニル、フェノチアジン等)

(5) 過酸化物質類

過酸化ジアルキル、過酸化アシル化合物、過酸化ベンゾイル、過酸化ラウロイルなど

(6) 酸化還元試薬

メチルピオロゲン、ニュートラルレッド、ヤーマスグリーン、トルイジンブルー、ジフェニルアミン、エチルナイルブルー、メチルカプリルブルー、フェニルアントラニル酸、N-メチルジフェニルアミン-p-スルホン酸、メチレンブルー、フェノサフラニンなど

(7) ビタミン・補酵素

ビタミンK₁~₃、ビタミンA、ビタミンB₁、B₂、B₆、B₁₂、ビタミンC、 α -リポイック酸、NAD、NADPなど

また、酸化還元剤量は、特に制限されないが、消臭有効成分1gに対して好ましくは0.00001~10重量%、より好ましくは0.0001~2重量%とする。

なお、本発明の消臭有効成分はそれ単独で用いてもよく、他の消臭有効成分と組み合わせて用いてもよい。

本発明に係る消臭剤は、種々の剤型に調製し得る。例えば、本発明消臭有効成分及び酸化還元剤を適宜な溶媒に溶解した溶液状のもの、或いはペースト状、粉粒状、ブロック状、更にはマイクロカプセル状など、所望の形態に調製したものを使用し得る。

更に、本発明の消臭剤のその他の成分としては、その消臭剤の種類、剤型等に応じた適宜な成分が配合され得る。例えば、口臭予防、口臭除去のための口腔用消臭剤として使用する場合、香味成分として第2リン酸カルシウム、炭酸カルシウム、ピロリン酸カルシウム、不溶性メタリン酸ナトリウム、非晶質シリカ、結晶質シリカ、アルミノシ

本発明において、消臭有効成分と酸化還元剤との併用態様は種々選定され、例えば消臭有効成分と酸化還元剤とを混合して消臭剤中に配合するようにしてもよく、また消臭有効成分と酸化還元剤とを別々に乃至は隔離して製品中に配合し、使用時に混合、活性化する方法も採用し得る。

また、消臭有効成分に酸化還元剤を作用させて活性化した消臭有効成分を配合することもできる。この活性化消臭有効成分を得る方法としては、例えば消臭有効成分を含む溶液に酸化還元剤が気体の場合はこれを3分~24時間程度導入し、また液体や固体の場合はこれを添加した後、1分~6時間程度攪拌する方法が採用し得る。なお、処理後は必要に応じ溶液を乾燥して固形の活性化消臭有効成分を回収することができる。

本発明の消臭有効成分の使用量は、消臭剤の種類等によって相違するが、例えば植物抽出物を用いる場合は消臭剤全成分量に対して植物抽出物固分量で0.0001~50重量%、特に0.001~10重量%とすることが好ましい。

リケート、酸化アルミニウム、水酸化アルミニウム、レジンの研磨剤(配合量通常20~60重量%)、カルボキシメチルセルロースナトリウム、ヒドロキシエチルセルロース、アルギン酸塩、カラゲナン、アラビアガム、ポリビニルアルコール等の粘結剤(通常0.3~5重量%)、ポリエチレングリコール、ソルビトール、グリセリン、プロピレングリコール等の粘着剤(通常10~70重量%)、ラウリル硫酸ナトリウム、ドデシルベンゼンスルホン酸ナトリウム、水添添加ココナッツ脂肪酸モノグリセリドモノ硫酸ナトリウム、ラウリルスルホン酸ナトリウム、N-ラウロイルザルコシン酸ナトリウム、N-アシルグルタミン酸塩、N-ミリスチルザルコシン酸ナトリウム、N-アシルアラニン、ラウリン酸ジエタノールアミド、ショ糖脂肪酸エステル等の発泡剤(通常0.1~5重量%)、それにペパーミント、スベアミント等の精油、 β -メントール、カルボン、オイゲノール、アネトール等の香料素材などの香料、サッカリンナトリウム、ステビオザイド、ネオヘスベリ

ジルジヒドロカルコン、グリチルリチン、ペリラルチン、p-メトキシシンナミックアルデヒドなどの甘味剤、防腐剤などの成分が配合され、これら成分を水と混和し、常法に従って製造する。また、マウスウォッシュ等の口腔洗浄剤その他においても、製品の性状に応じた成分が適宜配合される。なお、これら口腔用組成物においては、塩化リゾチーム、デキストラナーゼ、溶菌酵素、ムタナーゼ、クロロヘキシジン、ソルビン酸、アレキシンジン、ヒノキチオール、セチルピリジニウムクロライド、アルキルグリシン、アルキルジアミノエチルグリシン塩、アラントイン、ε-アミノカプロン酸、トラネキサム酸、アズレン、モノフルオロリン酸ナトリウム、フッ化ナトリウム、フッ化第1錫、水溶性第一もしくは第二リン酸塩、第四級アンモニウム化合物、塩化ナトリウムなどの有効成分を配合することもできる。

また、家庭や環境などで発生する悪臭に対して使用する家庭用、工業消臭剤の場合も、その種類等に応じた通常消臭剤に用いられる成分を配合で

き、例えばケトン類、活性炭、シリカゲル、アルミナ等の吸着剤などを配合することができる。

発明の効果

以上説明したように、本発明の消臭剤は従来の消臭有効成分を単独で用いた消臭剤よりも優れた消臭力を有し、人体、家庭、環境などで発生する悪臭に対する消臭剤として広範囲に利用することができる。

また、本発明によれば、消臭有効成分の配合量を少量化することができ、着色、味の低下、沈殿等の問題も改善されるので、製剤化が容易であり、この点からも広く応用することができる。

以下、本発明に係る消臭有効成分についての実験例を示す。

(実験例1)

第1表に示す植物の抽出物0.1mlと酸化還元剤0.5mlとをpH7.0の0.05Mリン酸緩衝液2.5mlに溶かしたものを容積25mlの試験管に入れ、更に1ppmメチルメルカプタン0.5mlを加えて密栓し、36℃で6分間反応させた。

反応終了後、試験管のヘッドスペース中のメチルメルカプタン量をガスクロマトグラフィーで測定した。

これら検体のメチルメルカプタン消臭率をリン酸緩衝液のみを試験管に入れたものをコントロールとして下記式に従って算出した。

$$\text{メチルメルカプタン消臭率(\%)} = \frac{C-S}{C} \times 100$$

S: 検体のヘッドスペース中のメチルメルカプタン量

C: コントロールの

なお、第1表の消臭有効成分及び酸化還元剤の各々を単独で用いた場合についても、上記と同様に処理してヘッドスペース中のメチルメルカプタン量を測定し、各々の単独消臭率を算出した。

以上の結果を第1表に示す。

表 1

植物抽出物 A	A 単独消臭率 (%) I	酸化還元剤 B	B 単独消臭率 (%) I	A+B 消臭率 (%) II	$\frac{II}{I+I'}$
セージ (30%エタノール抽出)	30	塩化第二鉄	12	69	1.6
オウゴン (10%エタノール抽出)	26	"	"	66	1.7
ローズマリー (水抽出)	35	クエン酸塩	30	90	1.4
チョウジ (50%エタノール抽出)	30	ハイドロキノン	33	95	1.5
カシ (70%エタノール抽出)	29	"	"	92	1.5
ザクロ (50%エタノール抽出)	38	ピタミロン _{K1}	25	90	1.4
マジミラム (水抽出)	44	ピタミロン _{B11}	1	62	1.4
タイルム (水抽出)	48	アスコルビン酸塩	5	70	1.3
アラノール抽出	19	"	"	48	2.0
イノコズチ (メタノール抽出)	0	過酸化ベンゾイル	42	51	1.2
ナジメグ (50%エタノール抽出)	0	"	"	50	1.2

第1表の結果より、単独の消臭率(I)及び(I')の総和に比べ、併用した場合の消臭率(II)はかなり高く、両者の相乗作用により優れた消臭力を発揮することが確認された。

【実験例2】

第2表に示す植物の抽出液100ml(乾燥時間形分として約2gの抽出物を含む。)に対し、下記方法により酸素ガス処理、 H_2O_2 処理及びCaO処理を施し、処理後得られた液を乾燥して活性化植物抽出物よりなる消臭剤を得た。

酸素ガス処理

植物抽出液100ml中に酸素ガスを20ml/分の速度で25℃において3時間流し込んだ。

H_2O_2 処理

植物抽出液100mlに10% H_2O_2 溶液1mlを加え、25℃において3時間攪拌した。

CaO処理

植物抽出液100mlにCaO 0.2gを加え、25℃において3時間攪拌し、これをイオン交換樹脂カラムに通し、通過液を回収した。

第 2 表

植物抽出物	単独消臭率 (%)	酸素ガス処理消臭率 (%)	H_2O_2 処理消臭率 (%)	CaO処理消臭率 (%)
セージ (30%エタノール抽出)	30	65	—	—
オウゴン (10%エタノール抽出)	26	62	—	—
ローズマリー (水抽出)	35	—	92	—
チョウジ (50%エタノール抽出)	30	—	80	—
カシ (70%エタノール抽出)	29	—	—	45
ザクロ (50%メタノール抽出)	39	—	—	51
マジョラム (水抽出)	44	59	—	—
タイム (水抽出)	48	63	—	—
アラメ (メタノール抽出)	19	—	65	—
イノコズチ (メタノール抽出)	0	—	40	—
ナツメグ (50%エタノール抽出)	0	—	—	20

なお、水100mlに対して上記酸化剤処理したものは、処理後の液を乾燥しても残渣を認めず、消臭力の測定は不能であった。

次に、この活性化植物抽出物消臭剤について実験例1と同様にメチルメルカプタン消臭率を求めた。なお、活性化していない各植物抽出物を単独で使用した場合のメチルメルカプタン消臭率も同様に測定、算出した。

以上の結果を第2表に示す。

第2表の結果より、あらかじめ植物抽出物を酸化還元剤と反応させることにより得られた活性化植物抽出物消臭剤を、植物抽出物を単独で使用する場合に比べ、消臭力に優れていることが確認された。

以下、実施例を挙げて本発明を具体的に説明するが、本発明は下記実施例に制限されるものではない。

なお、以下の例において%はいずれも重量%を示す。

【実施例1】 練 留 磨

水酸化アルミニウム	43%
グリセリン	20
カルボキシメチルセルロースナトリウム	2
ソジウムラウリルサルフェート	2
香料	1
サッカリンナトリウム	0.1
オウゴン30%エタノール抽出物	0.15
生石灰(CaO)	0.05
N-ラウロイルサルコシンナトリウム	0.2

水	残
計	100.0%
〔実施例2〕 歯 磨	
第2リン酸カルシウム	45.0%
無水珪酸	2.0
カルボキシメチルセルロースナトリウム	0.3
カラギーナン	0.8
ソルビット	20.0
プロピレングリコール	2.0
ラウリル硫酸ナトリウム	1.5
エゾウコギエタノール抽出物の活性化物 (酸素ガス処理)	0.05
香 料	適 量
水	残
計	100.0%

〔実施例3〕 液 状 歯 磨	
ポリアクリル酸ナトリウム	50%
グリセリン	30
香 料	0.9

〔実施例5〕 ト ロ ー チ	
アラビアガム	6%
バラチノース	30
マルチトール	20
イソマルトース	22
ゼラチン	3
香 料	0.2
ダイオウ50%エタノール抽出物	0.5
塩 化 亜 鉛	0.1
水	残
計	100.0%

〔実施例6〕 チューインガム	
ガムベース	20%
砂 糖	16
イソマルトース	20
マルトース	20
コーンシロップ	11.3
水 飴	11.5
香 料	0.5

サッカリンナトリウム	0.1
アラメの水抽出物	0.25
過酸化ベンゾイル	0.05
エタノール	3
N-ラウロイルサルコシンナトリウム	0.2
リノール酸	0.04
水	残
計	100.0%

〔実施例4〕 マウスウォッシュ	
エタノール	20%
香 料	1
サッカリンナトリウム	0.05
シャゼンソウ30%エタノール抽出物	0.2
過硫酸ナトリウム	0.1
モノフルオロリン酸ナトリウム	0.1
クロルヘキシジン塩酸塩	0.01
ラウリルジエタノールアמיד	0.3
水	残
計	100.0%

ローズマリーメタノール抽出物	0.5
ヘモグロビン	0.2
計	100.0%

〔実施例7〕 化粧せっけん	
カルボキシメチルセルロース	8%
過 脂 肪 剤	2
石 け ん 剤 地	50
ラウリル硫酸トリエタノールアミン	30
7-ハイドロキシー-6,8-ジメトキシ クマリン-D-グルコサイド	0.01
タイム30%エタノール抽出物	0.3
クエン酸 鈉	0.01
色 素, 香 料	適 量
水	残
計	100.0%

〔実施例8〕 ハンドローション	
セチルモノステアレート	1.0%
イソプロピルパルミテート	4.0
ポリエチレングリコール100ジステアレート	2.0

グリセリン	8.0
セチル硫酸ナトリウム	5.0
シラカバ水抽出物	1.0
二酸化マンガン	0.1
色素, 香料, 防腐剤	適量
水	残
計	100.0%

〔実施例9〕化粧水

クエン酸	0.1%
パラフェノールスルホン酸亜鉛	0.2
ソルビット	2.0
グリセリン	3.0
ポリオキシエチレン(20EO)オレイルエーテル	1.0
エタノール	15.0
チョウジ水抽出物	0.2
アスコルビン酸亜鉛	0.05
香料, 防腐剤	適量
水	残
計	100.0%

〔実施例12〕ヘアリンス

ステアリルジメチルアンモニウムクロライド	3.0%
グリセリンモノステアレート	3.0
ケイヒ30%エタノール抽出物	0.2
酢酸亜鉛	0.05
着色料	0.05
香料	0.05
水	残
計	100.0%

〔実施例13〕生ゴミ消臭液

エタノール	70%
イトヒメハギエタノール抽出物	1
ハイドロキノン	0.1
香料	1
水	残
計	100.0%

〔実施例14〕フットスプレー

エタノール	50%
-------	-----

〔実施例10〕アフターシェービングローション

エタノール	40.0%
メントール	0.05
ベンジルアルコール	0.25
グリチルレチン酸	0.05
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油モノ ビログルタメートモノイソステアレート	0.7
香料	0.1
チンピ30%エタノール抽出物	0.2
クエルセチン	0.1
水	残
計	100.0%

〔実施例11〕液状シャンプー

グリセリン	10.0%
アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム	20.0
クロメ30%エタノール抽出物の活性化物 (オゾンガス処理)	0.05
香料	適量
水	残
計	100.0%

ジクロロジフルオロメタン	49.9
ウミトラノオのγ-ブタノール抽出物の 活性化物(過酸化水素処理)	0.1
計	100.0%

〔実施例15〕マイクロカプセル化経口剤

温水1.00mlにゼラチン粉末5gを溶かした後、カシ乾燥エキス2.0gとコハク酸亜鉛0.1gを加え、よく分散させた。

一方、界面活性剤として0.2%ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油を含有する酢酸エチル：クロホルムの3：4混合溶液を調製し、十分に冷却した。次いで、この混合溶液に前述の分散液を滴下して分散させた後、逡過してマイクロカプセルを得た。

〔実施例16〕腸溶性マイクロカプセル

ローズマリー乾燥エキスの顆粒2gにチトクロームA 0.1gをスプレーした後、更にピロスルファートナトリウム含有セルロースアセテートフィルムタレットの重曹水溶液をスプレーし、ローズマリ

一乾燥エキスをセルロースアセテートフタレート
が0.3~2重量%付着したマイクロカプセルを
得た。

このマイクロカプセルを日本薬局方(第十改正)
の崩壊試験法に従って崩壊試験を行なったところ、
第2液(pH約7.5)中で崩壊する腸溶性カプセル
であった。

計

100.0%

出願人 ライオン株式会社
代理人 井理士 小島 隆 司

〔実施例17〕 ペット用スプレー

エタノール	50%
ジクロロジフルオロメタン	49.95
マジョラムのエタノール抽出物の活性化物 (過酸化水素水処理)	0.05
計	100.0%

〔実施例18〕 室内脱臭剤

エタノール	20%
ダイオウ50%エタノール抽出物の活性化物 (過マンガン酸カリウム処理)	0.05
香料	適量
水	残

【公報種別】特許法第17条の2の規定による補正の掲載
【部門区分】第3部門第2区分
【発行日】平成6年(1994)10月21日

【公開番号】特開平1-16713
【公開日】平成1年(1989)1月20日
【年通号数】公開特許公報1-168
【出願番号】特願昭62-170897
【国際特許分類第5版】

A61K 7/32 7252-4C

A61L 9/01 R 7167-4C

手 続 補 正 書 (自発)

平成6年1月/3日

6. 補正の内容

- (1) 明細書第11頁第17行目の「補群素」を「補群素」と訂正する。
(2) 同第30頁下から第31行目の「A」を「a」と訂正する。

以 上

特許庁長官 藤 生 渡 殿

1. 事件の表示

昭和62年特許願第170897号

2. 発明の名称

消臭剤

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住 所 東京都墨田区本所1丁目3番7号

氏 名 (有)ライオン 株式会社

代表者 高 橋 達 朗

4. 代 理 人

〒104

住 所 東京都中央区銀座2丁目3番19号

銀座森澤ビル3階 電話 (3545) 6454

氏 名 弁護士 (7930) 小 島 勝 司

5. 補正の対象

明細書の「発明の詳細な説明」の図。